

近代日本における功利と道義 ーリベラリストの言説を中心にー

松 井 慎一郎

はじめに

最近、地球温暖化の原因と考えられる自然災害や疫病等が深刻な問題となっている。1950年代以降本格化してきた大量生産・大量消費文明は、ここに至って限界の様相を見せ始めているのではないか。現代文明は2070年に崩壊するとの環境考古学者による不吉な予測¹⁾は俄かに現実味を帯びつつある。快適な生活の向上こそ幸福の証と考えてきた我々のこれまでのライフスタイルは、今、再考を迫られているのではないだろうか。

リーマン・ショック後の2009年のNHK大河ドラマは「負け組」の戦国大名・直江兼続を主人公とした「天地人」であったが、その初回に、天下人・豊臣秀吉から直臣に迎えたいとの誘いを断り、主君・上杉景勝に忠義を尽くすことに人生の意義を見出す主人公が「蔵の財たからより身の財、身の財より心の財」と言うシーンがあった。このセリフが、日本仏教界の革命児・日蓮が門徒の四条頼基に与えた書簡（「崇峻天皇御書」）のなかの一文「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり」²⁾に拠るものであることは明らかである。主君・北条光時に法華経を勧めたがゆえに一時は所領没収の憂き目を見たものの、やがて持ち前の忠誠心から信頼を回復していった頼基に対して、決して浮かれることなく信義を貫くことを忠告した言葉である。それより時代はだいぶ下るが、日蓮を「我等の理想的宗教家」³⁾として最大の敬意を抱いていた内村鑑三は、「後世への最大遺物」(1894年7月)と題す

1) 安田喜憲『生命文明の世紀へ』第三文明社、2008年、176頁。

2) 『日蓮聖人全集』第4巻、春秋社、226頁。

3) 内村鑑三著・鈴木俊郎訳『代表的日本人』岩波文庫、1941年、173頁。

る講演において、青年たちに対して、金銭や事業ではなく、「勇ましい高尚なる生涯」こそ後世に残すことのできる最大遺物であると述べ、「正義」のために行動すべきことを説いた⁴⁾。かつて内村の聖書研究会に通っていた河合榮治郎が熱血教師として学生たちに常に投げかけていたのは、「人生には右せんか、左せんか迷うときがある。そんなとき自分に不利だと思われる方の道を選び給え。人間は無意識の内に、自分に都合のいい道ばかり行こうとするものだからね⁵⁾」との忠告であった。これまで多くの思想家・哲学者が、金銭的な富や身体的な榮譽、つまり功利⁶⁾以上に価値のあるものを見出し、その追求に邁進すべきことを自己に課し、他者にも説いてきた。しかし、現在の社会経済の行き詰まりという実状は、人々の最大関心事が依然として功利の追求にあり、それが社会発展の原動力となってきたことを物語っている。

功利の追求が公然と主張され、それに躍起となってきたのは、我が国において、さほど古いことではない。「大東亜戦争」と呼ばれた先の戦争の表向きの目的は、「大東亜共栄圏」の建設であり、それは自国の生存・防衛というより、西洋列強から虐げられてきたアジアを解放するという大義に基づくものであった。それは、ドイツ民族生存に不可欠な生存圏の確保というナチス・ドイツの戦争目的と比較すると明らかである。社会進化論者・加藤弘之と同郷で、その思想的影響を受けた代議士の斎藤隆夫が所謂「反軍演説」（「事変処理二関スル質問演説」衆議院本会議、1940年2月2日）において批判したのは、「生存競争」「優勝劣敗」「適者生存」であるべき中国との戦争を、政府・軍部が「東亜新秩序」なる「道義」を振り回して、国民の犠牲を閑却するという事実であった⁷⁾。

4) 『内村鑑三全集』第4巻、岩波書店、1981年、290頁。

5) 『河合榮治郎・言行録《3》』『河合榮治郎全集月報』16、1968年12月、5頁。

6) 本稿で使用する功利という語は、『管子』で説くところの功名と利得という意味であり、ベンサムが「最大多数の最大幸福」という語で体系化した、イギリスの伝統的倫理思想である Utilitarianism に拠るものではない。Utilitarianism が「功利主義」と訳されてきたことの不当性に関しては、山田孝雄「英国功利主義の日本への導入についての一考察」（『帝京短期大学紀要』3、1979年9月）を参照。

7) 斎藤の戦争論については、出原政雄「斎藤隆夫の軍部批判の論理と戦争肯定論」（『同志社法学』63巻1号、2011年6月）を参照。

我が国特有の戦法として知られる「特攻」にしても、その命中率は二割にも満たないものであり、効率という点で決して有効であったわけではない⁸⁾。そもそも国民総生産が11.83倍もの相手と戦争すること自体が、功利という観点からだけでは説明不可能である。

道義を強く打ち出すことにより、多くの日本人が、その道徳心・倫理観を鼓舞され、自らの功利を省みずに戦争に動員されていったのが、「大東亜戦争」であった。敗戦によって、大日本帝国が崩壊し、深刻な食糧難に立たされた国民は、道義への熱を一気に冷まし、功利に向ってひたすら歩み出していった。道義への反発が必要以上に功利への関心へと向かっていった事実は否めない。戦後69年におよぶ功利の追求は、道義を名目に戦争へと追いやられた苦い過去へ後戻りするのを防ぐ平和の道であったといえないこともない。

とはいうものの、明治維新以来の大日本帝国の歩みが実際のところ道義一辺倒でなかったことも事実である。たとえば、松岡洋右の「満蒙は我国の生命線である」との「名言」に象徴されるように、我が国の大陸拡張主義は国家政策というレベルでは、軍事的経済的な利益を追求するものであった。朝鮮への支配も、山県有朋による第1議会における施政方針演説（1890年11月）に象徴されるように、「主権線」を守るための「利益線」の確保であった。また、インフラ整備や人口増加などの点から朝鮮統治の正当性を主張する日本に対して、朝鮮が強く反発したのは、道義を最高目的とする儒教的民本主義の政治文化を持つ朝鮮民族⁹⁾が大日本帝国の功利という価値観を受容できなかったことによるものではないか。

つまり、封建時代の遺物ともいえる道義¹⁰⁾は、西洋化・近代化を目指した明治維新以降においても消え失せることなく、新たな価値観である功利

8) 航空特攻に限って言えば、出撃機総数約3300機のうち、命中したものの11.6%、至近への突入に終わったものの5.7%、合計17.3%であった。吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』吉川弘文館、2007年、260頁。

9) 朝鮮の政治文化については、趙景達『近代朝鮮と日本』（岩波新書、2012年）を参照。

10) 周知のとおり、武家の基本法典といわれる御成敗式目（1232年制定）は、「ただどうりのおすところ」（北条泰時消息）とあるように、道理（道義）に沿って定められたものである。

との間で、対立と調和を繰り返してきたように思える。

これまで近代日本における思想の歩みは、伝統と近代、保守と革新、全体と個、理想と自然、国家と社会などの対立軸から考察する機会が多かったが、ここでは、功利と道義という対立軸から振り返ることとしたい。そのことにより、従来の観点からは見えにくかった日本近代思想の問題点を剔抉することができるかもしれないし、また、行き詰った現代の社会経済を建て直すヒントを導き出すことができるかもしれない。

筆者の能力および紙面の都合等から、以下、近代日本における五人のリベラリストに限定して、その言説から功利と道義の問題を考察していくことにする。

I. 福沢諭吉 (1834-1901) の富国強兵論

かつて丸山眞男は「ある意味では明治期の思想家のなかで今日彼ほどかたがれながら彼ほど理解されなかった、したがって本当の意味では私達の思想に影響を与えていない人は少ないような気がします」¹¹⁾と指摘した。福沢の思想をどう理解するかにもよるが、この丸山の指摘を、21世紀の今日まで当てはめて考えることは可能だろうか。福沢思想あるいは福沢的な考え方は、高度経済成長を経て経済大国として発展していった戦後日本社会の原動力の一つとして機能したとはいえないだろうか。1984年に最高紙幣の肖像画として登場した福沢は、「同期」の新渡戸稲造や夏目漱石が身を引くなかで、30年にわたり、その地位を保ち続けている。国民の眼を道義より功利の追求に向けたという点で、福沢の果たした役割を過少評価することはできない。

中津藩の下級藩士の家に生まれ、父を早くに亡くし、母は家の切り盛りに追われたため、末子の福沢は、幼少期において学問をする機会を与えられなかった。福沢が塾に通いはじめたのは、数え年にして14,5歳になってからであり、それまでに彼の人格はある程度形成されていたものと考え

11) 丸山眞男「福沢諭吉について」1958年11月、『丸山眞男集』第7巻、岩波書店、1997年、371頁。

られる。『福翁自伝』（1899年）には、主君・奥平大膳大夫の名が記されている反故を踏みつけたり、養家の稲荷社の御神体を入れ替えても平然としていた幼少期の様子が綴られている¹²⁾が、これは福沢がいかなる権威や秩序に対しても一定の距離を置くことができたことを示している。「武士は食わねど高楊枝」の精神が常識であった当時、福沢は将来の夢について兄に「日本一の大金持になつて思ふさま金を使ふて見やうと思ひます」ときっぱり言っている¹³⁾。兄と違い、晩学の福沢は儒教教育を通じて封建道徳の洗礼を受ける以前に、自己の主体性を確立することができたのである。

また、福沢のパーソナリティを考える上で重要なのは、どこことなく冷めた感のある対人関係である。『福翁自伝』には、適塾時代の交友関係が綴られているが、三刀元寛という人物に、「鯛の味噌漬」と称してフグを食べさせ、消化が済む時間になって実のことを明かし、「今吐剤を飲んででも無益だ。河豚の毒が吐かれるなら吐て見ろ」と述べるところは、福沢自身も言うように、冗談としては度が過ぎていた¹⁴⁾。また、手塚良庵（のちの良仙。漫画家・手塚治虫の曾祖父）が心を入れ替えて遊郭通いを止め勉学に勤しんでいた様子を見て、福沢は「面白くない」と悪戯心を動かし、手塚鼯鼠の遊女になりすまして贗手紙を書き、手塚をして再び遊郭へと向寄せた¹⁵⁾。このエピソードは、福沢の並外れた高い文章力（遊郭に行ったことのない福沢は想像力だけで遊女になりすまして手紙を書いた）もさることながら、友人に対するシニカルな態度を表している。父の死後、父の勤務先であった大坂から故郷の中津に戻り、育った文化の違いもあって、近所の子供たちと打ち解けて遊ぶことがなく、しかも塾に通わなかったことで学友もいなかった福沢には、家族以外に親しい交わりを持つ経験がなかった。そのことが、一生を通じ、他人との間で一定の距離を取らせる要因と

12) 『福澤論吉全集』第7巻、岩波書店、1959年、16頁。

13) 同前、16頁。

14) 同前、60-61頁。

15) 同前、58-59頁。

なったのではないか。後述する石橋湛山が人を無邪気に信じてかかる性格であった¹⁶⁾のに対して、福沢にはどことなく人を疑うようなところがあったように思える。その性格が、疑いから発する近代科学の受容に役立ったことは確かであろう。

慶應義塾は我が国における授業料制度の濫觴として知られるが、「僕は学校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず¹⁷⁾と師弟関係にさほど拘らない福沢であったからこそ、「教授も矢張り人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある、構ふことはないから公然師を極めて取るが宜い¹⁸⁾と、教員と生徒の間を金銭で関係づける近代的な教育制度を作れたのである。福沢が望む師弟関係は、学問のみならず人生全般に対する教えを施そうとする師と、それに従順たる弟子という前近代的なものではなく、精神的にも経済的にも自立した個人と個人とが、「実学」すなわち近代科学を通じて結び付くというものであった。

君臣、師弟、父子、夫婦、長幼等の封建道德の代わり、新たに社会・国家の秩序を形成するものとして信じたのが「独立自尊」の精神であった。

議院政治の仕組の如きも、固より世の為め国の為めなど云ふ大造なるの事柄に依て出来たるものにあらず、全く己れの事は己れに取て之を行ひ、人に頼まず又頼まれずとの利己主義より外ならず。若しも然らずして天下の為め抔云へることを目的として此仕組をなしたらば、大なる間違を生ずべし。蓋し天下とは個々人々の集合したるものを総称したる名目にして、一人一個の外に天下なるものある可らず。故に人々自ら己れの利を謀りて、他人に依頼せず又他人の依頼を受けず、一毫も取らず一毫も与へずして、独立独行の本分を守りたらば、期せずして自から天下の利益となり、天下は円滑に治るべし¹⁹⁾。

16) 芳賀綏『威風堂々の指導者たち—昭和人物史に学ぶ』清流出版、2008年、135頁。

17) 山口良藏宛福沢論吉書簡、慶應4年閏4月10日付。『福澤論吉全集』第17巻、岩波書店、1961年、52頁。

18) 前掲『福翁自伝』、163頁。

19) 福沢論吉「漫に大望を抱く勿れ」1889年7月、『福澤論吉全集』第12巻、1960年、187頁。

社会のため国のためという公共道徳を持たずとも、構成員一人ひとりが自己の欲望にしたがい行動することで、社会・国家の秩序は保たれる。これは、市場の自動調整作用を認めるアダム・スミスの「見えざる手」と同様の考えである。

そして、周知の如く、この「独立自尊」の精神は、個人の問題としてだけでなく、国家の問題として強調されるのである。

貧富強弱の有様は天然の約束に非ず、人の勉と不勉とに由て移り変わる可きものにて、今日の愚人も明日は智者と為る可く、昔年の富強も今世の貧弱と為る可し。古今其例少なからず。我日本国人も今より学問に志し気力を慥にして先づ一身の独立を謀り、随て一国の富強を致すことあらば、何ぞ西洋人の力を恐るゝに足らん。道理あるものはこれに交り、道理なきものはこれを打払はんのみ。一身独立して一国独立するとは此事なり²⁰⁾。

福沢が一国の独立を強調するようになった背景には、彼の国際情勢認識の変化が存在していた。開国直後に、「世界中広きことなれば、飲食衣服住宅等は土地の寒暖又旧来の風習にて国々異なることもある可けれども、人情は古今万国一様にて、言葉の唱へこそ違へ仁義五常の教なき国はなし」²¹⁾と述べていた福沢は、明治に入ると、西洋列強に対する不信感を一気に膨らませる。

抑も外人の我国に来るは日尚浅し。且今日に至るまで我に著しき大害を加へて我面目を奪ふたることもあらざれば、人民の心に感ずるもの少なしと雖ども、苟も国を憂るの赤心あらん者は、聞見を博くして世界古今の事跡を察せざる可らず。今の亜米利加は元と誰の国なるや。其国の主人たる「インヂヤン」は、白人のために逐はれて、主客処を異にしたるに非ずや。故に今の亜米利加の文明は白人の文明なり、亜米利加の文明と云ふ可らず。此他東洋の国々及び大洋洲諸島の有様は

20) 福沢諭吉『学問のすゝめ』第三編、1873年12月、『福澤諭吉全集』第3巻、1959年、43頁。

21) 福沢諭吉「唐人往来」慶応元年閏5月、『福澤諭吉全集』第1巻、1958年、14頁。

如何ん、欧人の触るゝ処にてよく其本国の権義と利益とを全ふして真の独立を保つものありや。「ベルシャ」は如何ん、印度は如何ん、暹羅は如何ん、呂宋呱哇は如何ん。(中略) 欧人の触るゝ所は恰も土地の生力を絶ち、草も木も其成長を遂ること能はず。甚しきは其人種を殲すに至るものあり。是等の事跡を明にして、我日本も東洋の一国たるを知らば、仮令乎今日に至るまで外国交際に付き甚しき害を蒙ることなきも、後日の禍は恐れざる可らず²²⁾。

西洋列強に対し国を開いて以来、現実にはさほど損害を受けていないにもかかわらず、彼らのこれまでの非文明諸国に対する所行を挙げ連ね、「後日の禍」を警告するあたりは、努めて論理的な文章を展開してきた福沢には、珍しく乱暴な議論といえよう。その後、自由民権運動が活発になり、論壇が民権の主張に傾くことに危機感を覚えた福沢は、バランスを取るためにあえて国権を強調するようになるが、そのこともあって、以後、一層、対外的脅威を煽る言論が展開される。

今日我輩は則ち世界古今に義戦なしと云はざるを得ず。其趣は恰も利を重んじて義を顧みざる商人等が、互に約束書を取替はし、互に其罽を窺ふて之を破らんとする者に異ならず。商人の破約には法廷公裁の恐る可きものありて容易に動き難しと雖ども、国と国との破約には世界中に其法廷あるなし。故に此約束を守ると守らざるとの機会、即ち条約書の威重を有すると否との機会は、両国の金力と兵力とを比較して其多寡強弱如何の一点に在て存するものと知る可し。余曾て云へることあり。金と兵とは有る道理を保護するの物に非ずして、無き道理を造るの機械なりと²³⁾。

経済力と軍事力の向上を国家の至上命題であるという言論は、政府の富国強兵政策を後押しする役割を担っていった。そこでは、功利の観点から戦争が肯定されるに至る。

22) 福沢諭吉『文明論之概略』1875年、『福澤諭吉全集』第4巻、1959年、202-203頁。

23) 福沢諭吉『時事小言』1881年、『福澤諭吉全集』第5巻、1959年、108頁。

蓋し戦争に就て最も恐る可きの禍は人命を失ふと財を費すと此二箇条なり。然るに統計の實際に於て、戦争に人命を失ふの数は之を平均して流行病に斃るゝものよりも少なく、某の大戦争と云ひ某の悪性流行病と云ひ、其死亡者の数を比較すれば戦死の数は誠に論ずるに足らざる程のものなれども、一は天然にして一は人為なるが故に、人為を以て人を殺すは宜しからざる事とするも、彼の財を費すの禍に至ては案外に軽小なるものして、仮令ひ一時の外見は恐る可きに似たるも、之を恢復すること甚だ難からず²⁴⁾。

やがて起こるべく戦争に備えて、軍事力とそれを支える経済力を蓄えておこななければならない。その地理的特質を踏まえて福沢が思い描いたのが、貿易立国としての日本であった。

何を以て我国の本色と為す可きや。我輩は唯商売、即ち是なりと答へんのみ。我国は四面海を環らし、気候中和にして地味豊沃、国中の川河能く舟楫を通じ、国状最も通商に適するのみならず、北西に朝鮮支那を控え、東は太平洋を隔てゝ米国に対するが故に、国民の奮発次第にて東洋貿易の中心たること難きに非ず²⁵⁾。

そして、「日本国中全く米麦の作を止めにして一粒の収穫なきも可なり。全国の人民は田畑を耕す代りに挙て蚕を飼ひ、食物は一切外国に仰ぐものと覚悟す可し」²⁶⁾との極論を吐くほど輸出品の主力として期待したのが製糸業であった。また、福沢は国内の生産品を海外に円滑に送りこむための運搬交通の主力として、当時、費用がかさみ建設が滞っていた鉄道に期待を寄せた²⁷⁾。しかも、そうした主張を現実にするため、自らの教え子を積極的に産業界に送り込んだのである。三菱商会の荏田平五郎や山陽鉄道の中上川彦次郎等の活躍は、師・福沢の構想を実現するものであった²⁸⁾。

24) 同前、177頁。

25) 福沢諭吉「商売を以て我国特有の所長と為す可し」1884年5月、『福澤諭吉全集』第9巻、1960年、479頁。

26) 福沢諭吉「養蚕の奨励」1894年5月、『福澤諭吉全集』第14巻、1961年、384頁。

27) 福沢諭吉「富国論」1885年4月、『福澤諭吉全集』第10巻、1960年、250頁。

28) 板橋守邦『日本経済近代化の主役たち』新潮選書、1990年、86-91頁。

以上のように、福沢が封建秩序の打破と近代社会の発展に多大な貢献を果たしたことは事実であるが、他方、その「独立自尊」の主張が多くの者を功利の追及へと追いやり、道義が衰退していった事実も否定できない。師・中江兆民から最も理想主義的な部分を受け継いだ幸徳秋水は、資本主義経済の矛盾が明確になりつつあった19世紀の最後の年に、次のように福沢思想を批判した。

個人主義は一面必ず利己主義たるを免れず、貴族専制、封建階級の弊毒其極点に達して、人民殆ど奴隷の境に沈淪するの時に於てや、個人自由独立自尊主義は実に世界の救世主なりき、福沢翁は実に此時に於て、此救世主を奉じて立ち、以て空前の偉功を奏せるが故に、此主義を持して渝らざる数十年、修身要領亦た之を以て骨子と為せりと雖も、而も見よ今や階級打破は秩序崩壊となり、自由競争は弱肉強食となり、個人自由主義は更に利己主義の反面を現はして、其弊毒は既に四海に横溢せるの時、所謂独立自尊を以て、否な単に独立自尊のみをもて、人々修身の要領となす、危険ならずといふことを得んや²⁹⁾。

もっとも福沢自身は、資本主義経済の行き着くところ、「貧富の不平均を生じて、之を制するの手段なく、貧者はますます貧に陥り、富者はいよいよ富を積み、名こそ都て自由の民なれ、其实是政治専制時代の治者と被治者との関係に異ならず³⁰⁾」という社会問題が起こることを予期していた。しかし、対外的な脅威を殊更恐れる福沢にとって、一身の独立が一国の独立のために犠牲となるのもやむを得なかった。イギリスと日本の工場労働者を比較した次の文章からは、長い労働時間のもと安い賃金で働かせられる労働者の悲哀といったものはまるで感じられない。

工場の秩序事務の整理は我国人の最も重んずる所にして、次第に慣るゝに従て次第に緒に就き、之を英国の工場に比して大なる相違なき上に、我国特有の利益は、工場の事業に昼夜を徹して器械の運転を中

29) 幸徳秋水「修身要領を読む」1900年3月、『幸徳秋水全集』第2巻、明治文献、1970年、308頁。

30) 福沢諭吉「富豪の要用」1892年12月、『福澤諭吉全集』第13巻、1960年、588-589頁。

止することなきと、職工の指端機敏にして能く工事に適すると、之に加ふるに賃金の安きと、此三箇条は英国の日本に及ばざる所なり。彼国の工場にて作業時間は毎日十時間にして、夜は器械の運転を止め職工も十時間を働くのみ。日本は昼夜二十四時間打通しに器械を運転して、其間凡そ二時間を休み正味二十二時間を二分して職工の就業は十一時間なり。故に紡錘一本に付き一年の綿花消費高に大なる差を見る可し³¹⁾。

福沢の晩年、足尾鉍毒事件が顕在化するが、福沢の経営する「時事新報」は、鉍毒被害民の立場に立つことなく、企業およびそれを擁護する政府寄りの言論を展開した³²⁾。

福沢は、「利を争ふは即ち理を争ふことなり」³³⁾ というように、功利の追求が道義に適うことを主張しているものの、その生涯において道義というものを真剣に考察する機会があまりなかったように思える。福沢の道徳感覚を示すものとしてしばしば取り上げられる「瘦我慢の説」にしても、「凡そ人生の行路に富貴を取れば功名を失ひ、功名を全うせんとするときは富貴を棄てざる可らざるの場合あり」³⁴⁾ と、功名ではなく富貴の道を選んだ勝海舟と榎本武揚を批判する。「蔵の財」と「身の財」の優劣は理解できても、「心の財」にまで目を向けることはなかったようである。

II. 内村鑑三（1861-1930）の「日本の天職」論

福沢より一代若い内村鑑三の場合、その生涯の割と早い段階で近代国家の矛盾が露わになったこともあり、近代文明社会の克服という点にその思想・評論活動の主力を向けることになった。家永三郎は、「近代精神の体得と表現とにおいて、内村は福澤よりも、更に数歩前進していたところがあつたばかりでなく、福澤によっては果されなかった別箇の新天地を開拓

31) 福沢論吉『実業論』1893年、『福澤論吉全集』第6巻、175-176頁。

32) 安川寿之輔『福沢論吉の戦争論と天皇制論』高文研、2008年、333-336頁。

33) 前掲『文明論之概略』、80頁。

34) 福沢論吉『明治十年丁丑公論・瘦我慢の説』1901年、『福澤論吉全集』第6巻、1959年、570頁。

するものがあつたという点で、見方によっては福澤以上の重要な歴史的意義を擔っている」³⁵⁾と指摘している。ただ、家永も指摘するように、青年期の内村すなわち日清戦争までの内村は、福澤同様に西洋近代文明に疑義を抱くことなく、日本はその導入に積極的に努めるとともに、隣国の中国・朝鮮にそれを伝えていく使命があるとさえ考えていた。福澤が地理的特質を踏まえて日本を貿易立国にしようと考えたのに対して、内村は、アメリカとアジア大陸の間に位置する島国としての地理的特質を活かして、「東西の媒酌人」としての「天職」を果たすことを期待したのである。

日本は東洋并に西洋の中間に立つものにして両洋の間に横たはる
飛石ステファストンの位置に居れり。風井に海流の方向は東西両洋間に航海する船舶をして我横浜港に寄港せざるを得ざらしむ、日本国本土は其背部を広漠たるシベリヤ并に満州海岸に向くと雖も其腹部は西洋文明の粹を受けつゝある所の米国に向け、右手を以て欧米の文明を取り左手を以て支那并に朝鮮に之を授け渡すの位地に居るが如し、日本国は実に共和的の西洋と君主的の支那との中間に立ち基督教的の米国と仏教的の亜細亜との媒酌人の位地に居れり³⁶⁾。

福澤とは違い、幼少期から高崎藩の儒者であつた父親から徹底的な儒教教育を授けられ、さらには、札幌農学校時代にキリスト教に入信した内村にとって、功利は排斥すべき対象であり、道義こそ追求すべきものであつた。未だ近代文明の矛盾に気付いておらず、キリスト教と進化論の影響から、神の摂理に基づいて正義の支配が前進するという独特の進歩主義的歴史観を有していた内村³⁷⁾にとって、西洋化・近代化は、道義に適うものとされたのである。日清戦争の開戦にさいして「義戦」と主張したのは、「東洋における進歩主義の戦士」日本が、朝鮮の近代化を阻む「世界の最大退歩国」清国を「警醒する」戦いと捉えたからである³⁸⁾。だからこそ、日清

35) 家永三郎「日本思想史上の内村鑑三」『回想の内村鑑三』岩波書店、1956年、118頁。

36) 内村鑑三「日本国の天職」1892年4月、『内村鑑三全集』第1巻、1981年、290頁。

37) 内村の歴史観については、松沢弘陽「内村鑑三の歴史意識 一～三」(『北大法学論集』17-19号、1966-67年)を参照。

38) 内村鑑三「日清戦争の義」1894年9月、『内村鑑三全集』第3巻、1982年、104-112頁。

戦後、閔妃殺害事件などにより、朝鮮への領土的野心が明確になると、「義戦若し誠に実に義戦たれば何故に国家の存在を犠牲に供しても戦はざる、日本国民若し仁義の民たれば何故に同胞支那人の名誉を重んぜざる、何故に隣邦朝鮮国の誘導に勉めざる」³⁹⁾と疑問を呈し、以後、日露非戦論に象徴されるように、日本の対外戦争を否定するようになったのである。また、資本主義経済の発展により、その矛盾が噴出するなかで、福沢と違って内村は、道義という観点から敏感に反応し、功利に浮かれる国民を批判する。

鉱毒被害地民の最初の大挙押出しが行われた頃から内村は、足尾銅山の鉱毒について関心を寄せ始めるが、1901年4月、木下尚江らとともに、はじめて鉱毒地に足を踏み入れた。その直後に『万朝報』（1901年4月25-30日）に掲載された「鉱毒地巡遊記」は、「悲しむ者は一府四県の民数十万人なり、喜ぶ者は足尾銅山の所有者一人なり、一人が富まんがために万人泣く」⁴⁰⁾と、足尾銅山の経営者・古河市兵衛を痛烈に批判するが、鉱毒被害民に対しても批判の矛先を向ける。

尊氏は確に日本が曾て生ぜし大英傑の一人なり、彼は無慾の人なりし、彼は友情に篤き人なりし、彼は忍耐の人なりし、彼は亦或意味に於ては誠忠の人なりし、彼れ不幸にして時の朝廷に反対せざるを得ざるの地位に立てり、(中略)余は足利人が其富を投じて一大石碑を『逆臣』足利尊氏のために足利又は鎌倉の地に建てざるを怪む、余は足利人が尊氏の如き大英雄を産し置きながら彼を以て誇らずして絹糸綿糸の産出高多きを以て誇るを怪む、嗚呼、物資的日本よ、汝の今日求むる所のは人物にあらずして物品なり、正義にあらずして金力なり、尊氏を出せし土地は尊氏を以て誇らずして、否な返て彼を産せしを以て耻として、其機業、其織物を以て誇るなり、嗚呼、関東八州、汝等も終には中国人九州人に物質化せられたり⁴¹⁾。

「逆臣」として排撃されてきた足利尊氏をあえて「大英傑」として評価

39) 内村鑑三「時勢の観察」1896年8月、『内村鑑三全集』第3巻、233頁。

40) 『内村鑑三全集』第9巻、1981年、158頁。

41) 同前、155-156頁。

するところに、内村にとっての道義が偏狭な忠君愛国とイコールのものでなかったことがわかる。それはもちろんキリスト教に基づくものであったが、近代文明の矛盾が深刻となるにしたがい、彼はキリスト信仰を深め、道義を強調するようになっていったのである。日露戦争にさいしては、「道徳を以て人類に取り最も大切なるものであると見做す者に取りましては、縦し戦争が大々の勝利を以て終ると致しますも、其得る所は決して失ひし所を償ふに足りないと思ひます」⁴²⁾と道義的な観点から非戦論を唱えた。しかし、道義を説く一方で、現実離れの傾向が強くなっていったことは否めない。「非戦主義者の戦死」(1904年10月)は、非戦論者に召集令状が来た場合、徴兵忌避の態度ではなく、戦地に進んで赴き、甘んじて敵弾的となることを説く、判断に迷う一文であるが、これは、前田英樹が指摘するように、「卑怯」な行動を受け容れられない内村の道徳観によるものであると捉えたと理解しやすくなる⁴³⁾。すなわち、徴兵忌避することによって世間から卑怯者呼ばわりをされ、また、自分の身代わりに他の人が召集されることが卑怯な行為となってしまふ。そこで、内村はキリスト教の贖罪論に基づいて次のように説くのである。

総ての罪惡は善行を以てのみ消滅することの出来るものであれば、戦争も多くの非戦主義者の無残なる戦死を以てのみ終に廃止することの出来るものである。可戦論者の戦死は戦争廃止のためには何の役にも立たない、然れども戦争を忌み嫌らい、之に対して何の趣味をも持たざる者が、其唱ふる仁慈の説は聴かれずして、世は修羅の街と化して、彼も亦敵愾心と称する罪念の犠牲となりて、敵弾的となりて戦場に彼の平和の生涯を終るに及んで、茲に始めて人類の罪惡の一部分は贖はれ、終局の世界の平和は其れ丈け此世に近けられるのである⁴⁴⁾。

しかし、近代社会において、道義のために自らの生命を犠牲にすること

42) 内村鑑三「戦時に於ける非戦主義者の態度」1904年4月、『内村鑑三全集』第12巻、1981年、150頁。

43) 前田英樹『信徒 内村鑑三』河出書房新社、2011年、153-154頁。

44) 内村鑑三「非戦主義者の戦死」、『内村鑑三全集』第12巻、447-448頁。

は容易いことではない。主君への忠義のために生命をも顧みなかったかつての封建時代を想起させるものでもある。こうした内村の主張が、当時、彼の周囲のキリスト教徒を含めて読者にどれだけ現実味をもって受け入れられたかはわからないが、後年、「大東亜戦争」末期において、「御国のため」と称して、特攻や玉砕といった生還の可能性の全くない戦法が登場したこととの類似性を多少なりとも感じざるをえない。

第一次世界大戦という未曾有の戦争が開始され、キリスト教国としての役割を期待していたアメリカが参戦した事実を受けて、内村は「世界の平和は如何にして来る乎、人類の努力に由て来らず、キリストの再来に由て来る、神の子再び王として来る時人類の理想は実現するのである」⁴⁵⁾と、再臨信仰に踏み込んでいくことになるが、その言動から社会意識は一層薄れていき、ドグマ的な性格が強くなっていく。関東大震災の翌年に発表した「日本の天職」（1924年11月）は、若き日に「東西の媒酌人」であると述べたかつての天職論の面影は全くない。

世界は復たび純信仰の復興を待ちつゝある。所謂西洋文明は其全盛に達して、此は世を救ふ者に非ずして却て亡す者である事が判明つた。物質文明の極度に達せし米国人自身が其未来に光明を認めずして暗黒を期待して居る。「人類の幸福は如何にして得らるゝ乎」の質問に題し、「世界の富源を開発し尽して」との答は満足なる答としては受取れない。全生涯を金儲け事業の為に費せし者が、老年に近いて実業界を去つて精神界に入らん事を願ふと同じく、今や人類全体が憧憬の目を純信仰に注ぐに至つた。誰か之を供する者ぞ。

○日本人ではあるまい乎。仏教が印度に於て亡びし後に日本に於て之を保存し、儒教が支那に於て衰へし後に日本に於て之を闡明せし日本人が、今回は又欧米諸国に於て棄られし基督教を日本に於て保存し、闡明し、復興して、再び之を其新らしき貌に於て世界に伝播するので

45) 内村鑑三「世界の平和は如何にして来る乎」、『内村鑑三全集』第24巻、1982年、135-136頁。

はあるまい乎。日本は神国であり、日本人は精神的民族であるとは自称自賛の言ではない。耻を知り名を重ずる点に於て日本人は世界第一である⁴⁶⁾。

そして、内村が「神国」日本を支える産業として期待したのが農業であった。「日本は元来農本国である。今より大に丁抹国に学んで、農を以て強大なる平和的文明国たるべきである」⁴⁷⁾と、デンマークを模範に農業を活発にすることを主張した。那須皓がN.グルントウィーの国民高等学校運動を紹介したA・H・ホルマンの著書を翻訳して『国民高等学校と農民文明』を出版したり、川西実三が内務省においてデンマークを範とする地方改良を目指したのも、信仰の師・内村に感化されてのものであろう⁴⁸⁾。道義を絶対視する内村の晩年の主張は、その後、右傾化する日本の歩みに少なからず重なり合う部分があったように思える。内村の弟子たちのなかには、「支那事変」や「大東亜戦争」が開始されると、それを「聖戦」視する者もいたのである⁴⁹⁾。

「近代人は自己中心の人である。自己の発達、自己の修養、自己の実現と、自己、自己、自己、何事も自己である、故に近代人は実は初代人である、原始の人である」⁵⁰⁾というように、近代文明を批判しキリスト信仰に身を委ねるあまり、内村の思想は「無我」の境地に至ったといえないか。自己というフィルターを通さない道義は、滅私奉公の道に至る危険性がある。

46) 『内村鑑三全集』第28巻、1983年、406-407頁。

47) 内村鑑三「西洋の模範国デンマルクに就て」1924年9月、『内村鑑三全集』第28巻、378頁。

48) 内村のデンマーク観が門下に与えた影響については、拙稿「新渡戸・内村門下の社会派官僚」(『日本史研究』495号、2003年11月)を参照。

49) 小原信『評伝 内村鑑三』中央公論社、1976年、213-214頁。

50) 内村鑑三「近代人」1914年1月、『内村鑑三全集』第20巻、1982年、239頁。

Ⅲ. 河合榮治郎（1891-1944）の理想主義的社會主義

学生時代の一時期、学友とともに内村の聖書研究会に参加しながら、「individualityに立脚した思想」の重要性に気づき、キリスト教と袂を分かち⁵¹⁾、自らの思索に基づいて、独特の理想主義的人生観を構築しようとしたのが、河合榮治郎であった。河合はその代表的著書『学生に与う』（1940年）の中で、我執を捨てて神の前に敬虔に跪く宗教家と比較して、「理想主義者」の特徴を「現実の自我を叱咤し鞭撻し、理想の自我を目指して驀地に精進するが、己れを駆る力を、己れ自らより出づるとし己れ自らに帰する。（中略）己れの内心の真奥に、功を己れに帰する自負心（self-conceit）が抜け切れない」⁵²⁾と述べる。内村と違い、自我を捨てきれない河合は、自我を出発点として、遵守すべき道義を考察していったのである。

失恋などの自身の体験に加え、リップス、カント、T・H・グリーンなどの哲学を研鑽するなかで、河合は「人格の実現」（もしくは「人格の成長」）が「最高善」であるとの考えにたどり着く。

私は最高善とは、人格を全き程度にまで自我に実現せしむることであり、之を別な方面から云えば、自我を成長発展せしめて人格を実現せしめることである。人格は知識的、道徳的、芸術的の活動に「真」「善」「美」の理想を提示するが、之らの理想を実現せしめることに、吾々の最高善が存するのである⁵³⁾。

人格とは真、善、美を調和し統一した主体であるから、之が最高の価値、理想である。或いは之を最高善（the highest good, das höchste Gute, summum bonum）と云う。（中略）人格は最高の価値、理想であるから、之が我々の目的であって、あらゆる他のものは手段であり、之を物件（Sache）と云う、従って富も地位も我々の身体も亦、物件であって決して目的ではない⁵⁴⁾。

51) 拙稿「河合榮治郎と柏会」、河合榮治郎研究会編『教養の思想』社会思想社、2002年、260-261頁。

52) 『河合榮治郎全集』第14巻、社会思想社、1967年、156-157頁。

53) 河合榮治郎「個人成長の問題」1937年12月、『河合榮治郎全集』第18巻、1968年、18頁

54) 前掲『学生に与う』、53-54頁。

第一高等学校で新渡戸稲造校長から社会性・実践性を内包した人格主義の影響を受け、東京帝国大学法科大学では小野塚喜平次教授から最新の社会科学の知識を得た河合⁵⁵⁾は、「最高善」を観念の世界にとどめておくのではなく、現実社会における「最高善」の実現を目指して、「物件」にも眼を向け、その改良・向上に積極的に関わっていったのである。ここに、この思想家の最大の特徴がある。

河合が最初の仕事として取り組んだのは、農商務省官僚として労働問題に従事することであったが、それは労働者に「一個の人格としての自覚」をもたらすことを最大の目的とし、そのための手段として労働保険法や労働組合などを具体的に実現しようとするものであり、省内では多くの反発を招いたが、長尾春雄（日本生命）や木川田一隆（東京電力）をはじめ、後年、実業界で活躍する学生たちに多大な影響を与えた⁵⁶⁾。

その後、世界大恐慌に伴う日本経済の深刻な不況を東京帝国大学経済学部教授として迎えた河合は、社会主義経済への変革を主張し始める。しかし、ここでも、「最高善」が思考の中心であり、それに基づいて具体的な政策が主張されるのである。

社会制度の理想は何であるか。それは社会に属するあらゆる成員——人も一階級も犠牲とすることなく——をして人格の成長をなさしめることに在る。蓋し絶対に価値あるものは即ち善とは、唯人間の成長に在る。而して一人の人格の成長は、必然に他の人格の成長を関心事とする。他を犠牲として成長することは、真正の意味の成長ではありえない。従って一人の人格の成長と他人の人格の成長とが抵触することはありえない。若し社会に一人と他人と一部と他の部との間に抵触があるとすれば、それは人格の成長とは異なるものに、最高の価値を置くからである。例えば一国生産力の発展の為に、或いは一国家の膨張の為に、一部の成員が他の成員を犠牲とすることがあるならば、その場

55) 河合の思想形成に関しては、拙著『河合榮治郎—戦闘的自由主義者の真実』（中公新書、2009年）を参照。

56) 拙著『戦闘的自由主義者河合榮治郎』社会思想社、2001年、53頁。

合は生産力の発展又は国家の膨張を善なるものと前提しているからである⁵⁷⁾。

「社会に属するあらゆる成員の人格の成長」という「最高善」を実現するにあたって、資本主義経済は四つの弊害があると指摘する。第一に、「プロレタリア」（労働者）は「ブルジョア」（資本家）より剰余価値を搾取されるため、「生産過程に於て就業時間の過重を強いられ、その生活は一日の疲労を回復する為に辛うじて役立つのみで他事を顧みる暇がな」く、しかも、消費生活においては「賃金の低下がある上に、更に消費者として搾取され、高価なる生活資料を買うべく余儀なくされる」状態であり、人格の成長のために必要な道徳的経済的条件を欠く。第二に、「ブルジョア」は「何等労働に服することなしに、唯余剰価値を搾取して生活する」、しかも、「不労の所得を奢侈逸楽に消費しつつある」ため、人格の成長を阻害される。第三に、「ブルジョア」の搾取・支配に対して「プロレタリア」が憎悪と反感を抱き、「之らの不満は階級闘争の原因となり、反抗憎悪はプロレタリア階級に浸潤し、ブルジョアも亦直観的に自己の地位に疚しさを感じずるが故に、不安と恐怖とに脅威されている」ため、「あらゆる成員の人格の円満なる成長に反し、偏奇したる人格を作らずんば止まない」。第四に、「資本主義のイデオロギーたる物質主義は、人格成長と根本的に衝突する」と述べる⁵⁸⁾。

そして、河合はそれらの弊害の源泉として、「剰余価値の搾取」と「自由競争による生産の無政府状態」をあげ、新たな経済体制として、(一)「生産手段の私有の廃止と生産の統制」、(二)「あらゆる成員は労働の義務を負う。但し少年老廃者は此の限りではない。又労働とは必ずしも筋肉労働のみを意味せず頭脳労働をも包含する」、(三)「あらゆる成員に生活の最低標準を保証する」という三つの条件を含んだ「社会主義」を主張するのである⁵⁹⁾。しかも、その社会主義社会は暴力革命ではなく、議会主義に

57) 河合栄治郎『社会政策原理』1931年、『河合栄治郎全集』第3巻、1968年、72-73頁。

58) 同前、226-229頁。

59) 同前、237頁。

よって実現されるという。河合が議会主義の論拠としているのは、「社会は全社会構成員の所有であり、一部構成員の私有ではない」⁶⁰⁾ という古代ギリシア以来の一般的なデモクラシーの見解と、「議会主義に依らなければ、社会主義実現の後に於ても、常に反革命の危険性がある」⁶¹⁾ という戦略的な見解に加えて、民衆における社会への自覚を促進するという教育的見解であった。

議会主義に依れば、総選挙に於て民衆に資本主義の弊害を説破し、社会主義社会の必要を力説する。之により民衆の信念を改宗せしめ、未来社会に対する心の準備を整えしめるのである。かくの如くして社会主義社会の実現と共に、之を迎うべき新たなる信念とが平行する。若し社会主義者にして民衆を説得せんとするならば、民衆の伝統と戦い、反対思想の反駁に答えねばならない。かくすることにより社会主義自体が洗練され彫琢され、民衆の現実に触れた信条となりうるのである。此の意味に於て総選挙及び之に対する平生の準備は、一面に於て民衆に対する講壇よりする教育であり、他面に於て社会主義自体が自らを批判の俎上に置き、自己を反省し完成する修業の道場でもある。更に暫く社会主義の実現と云う特定の目的を除外しても、民衆は総選挙に於て夫々異なる社会批判を聴き、自ら何れかに賛成せざるをえない立場に置かれることにより、凡そ社会制度の意義を自覚せしめられ、いかに制度を批判すべきかを教育される。若し革命により社会が変革されるならば、此の教育過程はなされずして過ぎされる。然し此の過程は単に社会主義の実現に対して必要なるのみならず、一個の社会人として更に人としての成長に必要な過程である⁶²⁾。

「人格の成長」という点からも議会主義は尊重されるべきものであった。そして、河合は、明治憲法体制下においてできるだけ民主的な議会制度の実現を目指して、第一に「政府の中心が民衆の選挙する議員より構成される

60) 同前、247頁。

61) 同前、251頁。

62) 同前、250頁。

衆議院に存すること」、第二に「衆議院の議員を選挙する資格が、男女を問はず、苟も判断能力を有する年齢以上の一切の民衆に与えられること」、第三に「言論の自由が認められること」の三点の改革を主張するのである⁶³⁾。

「戦闘的自由主義者」といわれる河合の生涯の中で、その戦闘性を最も象徴するものとして評価されてきたのが、二・二六事件のさいの言動である。河合は、陸軍皇道派将校たちによる軍事クーデターに対して、「ファシストの何よりも非なるは、一部少数のものが暴力を行使して、国民多数の意志を蹂躪するに在る」⁶⁴⁾、「若し依然としてファシズムに存在の理由があると云うならば、寧ろあらゆる社会成員に公平に武器を分配し、然る後にフェアプレーを以て抗争せしめるに如くはないのである」⁶⁵⁾と、一大学教授でありながら、齒に衣を着せぬ激烈な表現で批判した。敬意を抱いていた美濃部達吉が事件の5日前（2月21日）に自宅で右翼青年に銃で撃たれ負傷していた事実を知っていた河合⁶⁶⁾は、こうした主張を発表することで自分の生命が危険に晒される可能性があることを十分承知していた。それでも踏み切ったのは、陸軍皇道派将校たちのクーデターが「最高善」を阻むものであると認識したからである。事件の6日前の2月20日には、第19回衆議院総選挙が行われており、その投票結果は、与党民政党が205議席を獲得して第一党に返り咲き、国体明徴運動を推し進めてきた野党政友会は、議席を70以上落とすというものであった。また、無産政党の社会大衆党が、18議席を獲得して大きく躍進した。河合は、選挙翌日の日記に「政友の敗北、社大〔社会大衆党—引用者注〕の進出は我が意をえた。近頃愉快なことであった」⁶⁷⁾と記し、政友会の後退と民政党・社会大衆党の躍進という選挙結果を素直に喜んだ。それは、「国民の多数

63) 同前、252頁。

64) 河合榮治郎「二・二六事件に就いて」1936年3月、『河合榮治郎全集』第12巻、1968年、46頁。

65) 河合榮治郎「時局に対して志を言う」1936年6月、『河合榮治郎全集』第12巻、53頁。

66) この襲撃事件が一般に知られるのは、1937年5月18日の記事解禁以降のことであるが、河合は襲撃翌日に美濃部を見舞っていた。「日記」1936年2月22日条、『河合榮治郎全集』第23巻、1969年、80頁。

67) 『河合榮治郎全集』第23巻、80頁。

が、ファシズムへの反対と、ファシズムに対する防波堤としての岡田内閣の擁護とを主張し、更にその意志を最も印象的に無産党の進出に於て表示した⁶⁸⁾との分析によるものであった。河合は、この選挙を契機に、国体明徴運動によって力を増したファシズム勢力が衰退していくだろうと期待していたのである。「人格の成長」を促進させる議会主義への攻撃は、河合にとって許しがたいものであった。自己を見つめるなかで内発的に導き出した道義に沿って生きることは、時として、孤独で無謀な戦いを強いられる。

また、戦争についても「社会のあらゆる成員の人格の成長」という「最高善」の観点から考察を試みる。「国民と云う共同体は自己の意志によって支配さるべきもので、他の国民の意志に隷属すべきではない。国民が独立自主の主体となった時、始めて国民の成員は自然の人格の成長を為しうるのである⁶⁹⁾」と考える河合は、民族独立を目的とする戦争は肯定する。被支配国はもちろんのこと、「他国民を隷属せしめて、何処に人格の成長があるか、若し人格成長の意志にしてあらば、独立を侵害しまい。独立によって支配国の成員は、畜に人格成長に失う所ないばかりでなく、却って之によって人格成長の正道に戻るのである⁷⁰⁾」と、支配国にとってもこの種の戦争は肯定されるべきだという。こうした考えを河合が現実の日本の植民統治の問題にどこまで当てはめて考えることができたのかは定かではない。石橋湛山のような植民地放棄論を展開することはなかったが、経済的文化的能力を涵養させて独立させる方向を目指していたようである。

一民族一国家ということが原則であるならば、各民族に独立の意志を認めるのが当然である。しかし具体的条件を考慮すれば、その民族に独立し得る経済的文化的能力が未だ無い場合には、直ちに独立せしめる方がよいか悪いか、は問題である。殊に現在の如き強大国家間に競争があるときは、武力も経済力も弱小な被支配民族は一強国の支配を

68) 前掲「二・二六事件に就いて」、45頁。

69) 河合榮治郎「國際的不安の克服」1934年10月、『河合榮治郎全集』第11巻、1967年、163頁。

70) 同前、164頁。

脱するとも、早晩他の強国により侵害されるであろう。特に今日の如きアウタルキー時代には経済的に自立することは至難である。されば先ず被支配民族のための特別議會を設立し、或いはその準備として地方的自治議會を設立し、経済力を涵養させて、その民族の政治的、文化的経済的能力の向上を図り、漸次終局目的なる完全独立賦与に進むべきであろう⁷¹⁾。

民族独立のための戦争は肯定するものの、経済的利益獲得のための「帝国主義戦争」はきっぱりと否定する。「たとえ戦争に伴う害悪はあろうとも、それはほんの一時的に止まって、勝利を占めた後に、原料を独占し販路を独占したならば、国家は富み榮えて、国民の経済生活は向上し、かくて人格成長の条件は実現する」という論理に対して、河合は、仮に戦勝国となっても資本家と労働者間の経済格差が広がるという理由で否定するのである。

なるほど原料、販路、投資を独占することによって、内地の産業は勃興し、労働者の就職は増加し、資本家の超過利潤の一部は労働者にも及んで、賃銀その他の労働条件は向上するだろう。その限りに於て確かにプロレタリアにとっても不利ではない。だが資本家階級の獲得する超過利潤と比較して、その軽重果して何れであるか。のみならず大資本家の集中と集積とに逆比例して、中産階級はその圧迫に抵抗し兼ねてプロレタリアに没落し、資本家の海外進出は、内地に独占体が形成することを前提するから、中産階級も勤労階級も消費者として、独占価格による物価騰貴の前に立たねばならない。そこで帝国主義戦争は、国家を富み榮えさせるではあろう。〈然し国家の富の総量が増加することにはなっても必ずしもすべての階級に富が公平に分配されることにはならない⁷²⁾。

「ある自我」を「あらねばならぬ自我」に高める「人格の成長」という

71) 河合榮治郎『自由主義の歴史と理論』1934年、『河合榮治郎全集』第9巻、1969年、150頁。

72) 前掲「國際的不安の克服」、165頁。〈〉内は発表当時、伏字。

課題を通じて、河合は、内村のように「無我」の境地にいたるのではなく、「大我」の観点に立って道義を追求していったといえるだろう。そこでは、功利は全く否定されるべきものではなく、最高目的の手段として利用されるべきものと捉えられたのである。

IV. 土田杏村 (1891-1934) の文明批評

河合と同年生まれで、河合同様、内面的自我の権威を重んじた理想主義・人格主義者でありながら、現実の社会に対しても敏感に対応した社会批評家・社会学者として活躍したのが、土田杏村であった。土田はもともと東京高等師範学校で、生物進化論の主唱者・丘浅次郎教授のもとで博物学の指導を受けていたが、やがて博物学への違和感や精神的煩悶から距離を置くようになり、その後は、文明批評家・田中王堂と出会い、大きな感化を受け、自らも文明批評家としての道を目指すことになった⁷³⁾。田中の斡旋による処女作『文明思潮と新哲学』(1914年)刊行以降、文学、芸術、哲学、思想に関する広範囲な評論活動を展開するようになった。その頃、書かれた日記の記述から、彼が何を問題としていたのかがわかる。

路傍の人の如何に醜きかな。私は常に彼等の顔に於て余りに的確と表はされる人生の彫刻を見るや、愕然として自ら怖れる事がある。悲惨な現実の苦闘はどんなに彼等の面を彫刻し、彼等をして取りかへす事の出来ない陋醜を自らに帯ばしめた事であらうか。絶えず何物にか警戒し、絶えず何程かの緊張を意識し、休むことなく圧迫を感じ悲惨を味はつて居る為に、彼等の表情は兎の如くに怯惰に、蛇の如く奸佞になつて来たことも、近代人は最早見做れて了つた眼に何等の異常も気付かず居る。(中略) 眼まぐるしい現代物質文明の中に居て、私は決して其の醜い彫刻を受けたくない。要するに彼等は芸術に生きる事が出来ないのである。生活を其のまゝに芸術化する事が出来ないのでは

73) 土田の思想形成に関しては、拙稿「思想形成期の土田杏村－文明批評家としての前提」(『越佐研究』第55集、1998年5月)を参照。

る⁷⁴⁾。

物質文明が進展するなかで、人間の本然的な生命の要求が閉ざされ、他律的機械的に生きざるをえない現代人の悲哀を土田は十分認識していたのである。人間性の復権を目指し、現代社会を文化的芸術的なものに転回することこそが、彼の文明批評の目的とするところであった。土田が同時代の理想主義的傾向を有する哲学者や評論家と異なっていたのは、個人の内面的生活に沈潜することなく、社会的生活にも多大な関心を示し、「生活全部を統一する哲学」の構築を目指したことである。

こゝに我々は人間の社会的生活、別して現今の如き複雑なる社会的生活に於ては、その社会的結合をなすに芸術的の要素以外に甚だ強力なる要素を見逃す訳にはいかない。それは即ち功利である。功利は芸術と等しく強く社会に働いて居る要素である。過去に於て強力であつたのみならず、将来に於て益々強力なるべきものである。文明は即ち一個の経済的存在であつて、将来は個人の経済的生活は益々敏感的に相互接触することとなり、複雑なる社会を乱調にならしめぬ様に保持して行くのは、たゞ功利にこれよるといふ状態になり至るであらう。我々はどうしても对社会の問題に於て功利といふことを考へぬ訳にはいかないのである。(中略)要するに私は、根本に生活全部を統一する哲学を要求して居る。然らざる限りは自己は決して安固なる地盤に生長して居るものでない。部分的には生きて居るが全体的には生きて居るといはれない⁷⁵⁾。

第一次世界大戦後、土田は、同時代の理想主義哲学者・左右田喜一郎や桑木巖翼らと同様、新カント学派の影響下に「文化主義」を主張するが、それは、「真」（真理的価値）、「善」（道徳的価値）、「美」（芸術的価値）の他に、「政治価値」「経済価値」をも「文化価値」の範囲に含める独特な哲

74) 土田杏村『文壇への公開状』岡村書店、1915年、53-54頁。この1914年に書かれた日記（月日は不明）の記述は、『文壇への公開状』のほか『靈魂の彼岸』（1920年）、『文化主義原論』（1921年）にも引用されている。

75) 土田杏村『文明思潮と新哲学』広文堂書店、1914年、346-347頁。

学的立脚点であった⁷⁶⁾。であるがゆえに、左右田や桑木とは異なり、「文化主義」の立場から積極的に現実の社会問題に対する評論活動を展開していく。「経済も政治も結局は人間の道義的な生活から遊離すべきではない、人間の道義的な生活より遊離した時、経済も政治も必然的に自殺するより外はなくなる⁷⁷⁾」というように、道義という観点から現実の経済や政治を変革しようとしたのである。

とくに経済批評は、近年、ベーシック・インカムの提唱者として再評価されつつあるC・H・ダグラス⁷⁸⁾の信用経済論の影響を受けたユニークなものであり、再考の価値がある。ダグラスの信用経済論の根幹をなすのは、「AプラスB定理」といわれる理論であるが、土田の説明によると次のようになる。生産工場の支払いは、賃金、俸給、配当からなるA群と、原料品、銀行決済およびその他の支出からなるB群の二つに分けられる。物価とは、この支払の全部を引き受けた額のことであるから、 $A + B$ が物価となり、個人の購買力はAである。ゆえに、個人の購買力の全額は物価の全額よりも上回ることができない。生産工場では商品を大量に生産しても、消費者の購買力では、その物価の全額を引き受けることが不可能であるから、商品は著しく堆積してしまう。そうした問題を除去するために工場は、第一にその過剰生産品を海外へ輸出する、第二に消費者の購買に直接関わらない工場の設備投資を行い、それを金融機関の発行する信用により決済するという処置を行う。その結果として、第一に各産業国間で市場競争戦が過熱化して戦争にまで発展する、第二に生産活動における銀行の力を増大させ、金融機関が生産を統制することになるという⁷⁹⁾。

昭和恐慌にさいして、ダグラスの理論に基づき、土田が主張したのが、

76) 拙稿「土田杏村の『文化主義』—理想主義と社会主義の調和に向けて」『民衆史研究』第53号、1997年5月、49-51頁。

77) 土田杏村『現代世相論』千倉書房、1932年、293頁。

78) 関曠野「ベーシック・インカムをめぐる本当に困難なこと」『現代思想』38-8、2010年6月、211頁。

79) 土田杏村「ダグラス」、大阪商科大学研究所編『経済学辞典』第3巻、岩波書店、1931年、1681頁。

国内経済優先論であった。土田は、金融機関を少数者の支配にゆだねることを廃し、「金融の国民化」を実現して、「国家内の生産の方向分量等を自足自給的ならしめるやうに統制する」ことを主張する⁸⁰⁾。土田は、第一に、生糸等の贅沢品の生産が日常必需品の生産を圧迫するため日常必需品の物価が上昇する、第二に、輸出先の国々の経済状況に左右されるため、世界不況のあおりを受けてしまう、という理由をあげて、輸出立国としてきた従来の経済政策を大きく転換すべきことを主張する。

輸出生産を奨励して国を富まさうとする。これは自由商業時代の着眼であつたが、今はそれに修正が必要であります。着眼を外国においてはならない。国内の一般大衆の生活を厚うすることを、第一に考へなければならぬ。ここに我々は、徳川時代の封鎖経済の上へ考へを一旦もどすのです。一国の生産は、一国内の大衆の生活を目標とするものでなければならぬ。その生活とは、第一に衣食住の物質生活である。その物質生活が厚うせられなければならぬ。生産の目標がそこに置かれるやうになると一国の産業は、国際関係や何かでは左右せられぶちこはされる、といふことがなくなる⁸¹⁾。

国内産業の中心を、生糸や絹織物等の海外輸出向けの生産から、国民の日常必需品の生産にシフトすべきであると主張するのである。日常必需品は、買い手が限定される生糸や絹織物等の贅沢品と違い、景気の変動に関係なく、生産すれば確実に買い手が現れる、「生産と同時に購買力を生産し得る」⁸²⁾性質のものである。であるがゆえに、日常必需品の生産は、その規模を拡大しても、拡大した分量に比例して購買者が増えるため、拡大すればするほど物価が低下し、労働者の雇用も増加し、失業問題も解決できる。さらには、将来予想される戦争をも回避できると考えられたのである。

一国家が自足自給的になつたとすれば、他の国家と戦争を交へることは必要でなくなる。輸出を必然とする国民経済の建前に於いては、市

80) 土田杏村『思想・人物・時代』千倉書房、1932年、148-149頁。

81) 前掲『現代世相論』、74頁。

82) 前掲『思想・人物・時代』、135頁。

場争奪の為めの戦争をも決行しなければならないが、自足自給の国家に対して何れの国家が積極的に侵略戦を開始するであらうか。私は日本が将来にはらんでゐる日米戦争の危機をも、日本が自給自足的になることによつて自づから解消せしめるものだと信じてゐる⁸³⁾。

国民経済を自給自足にすることで経済不況や帝国主義戦争を回避できると考えたが、アメリカやロシアとは異なり、狭い領土と貧しい資源しか有しない日本において自給自足は現実的には厳しい。しかも、世界恐慌の影響で、西洋各国でブロック経済が形成されつつあった。そこで、土田は、日本、「満洲」、「支那」の三国で「大アジア・ブロック」を形成すべきことを主張する。

フランスとドイツの如きは、今後二世紀や三世紀の努力を以ては、共同して一国家を成立せしめることなど夢想さへせられない状態であります。併し欧州経済連邦といふやうな形態の出来ることは、考へられる。そしてかうしたブロックは、近い将来に成立するに相違ないのである。そこでこれと同様のことを、日支間に考へればよいのであります。日本は支那の、独立国としての主権を少しも侵害する必要はない。支那は立派に独立国家としての支那として存立するが宜しい。ただ併し経済ブロックとしては、日本、満洲、中国と連結した一つのブロックを成立せしめることが、世界の経済地理的形勢として、最も自然のものだと私は主張するのです⁸⁴⁾。

土田が構想した「大アジア・ブロック」は、各国の主権を認める、あくまでも経済的な範囲に限定したものであり、日本が盟主となって、西洋列強の影響力を排除し、軍事的政治的文化的にアジア諸国をリードしていくという「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」とは全く異なるものであったことは言うまでもない⁸⁵⁾。

83) 同前、149-150頁。

84) 前掲『現代世相論』、57-58頁。

85) 土田の「大アジア・ブロック」構想と同時代のブロック経済論との比較に関しては、大木康充「戦間期のアジア・ブロック論に関する一考察—土田杏村の「大アジア経済ブロック」構想を中心に」(武田知己・萩原稔編『大正・昭和期の日本政治と国際秩序—転換期における「未発の可能性」をめぐる』思文閣出版、2014年)を参照。

また、自給自足の国民経済の確立を目指す土田は、農村問題に関心を向ける。ダグラス理論の影響により生産と消費の調和を考えていた土田は、一切の生産を農村に押し付け、消費活動のみを行う都市を「社会全体から見て、全く絶対的消耗をなす不当の存在物」⁸⁶⁾と指摘する。都市と農村の間の経済関係を独特の数学的公式を使い、都市がその規模を拡大したり、物質の消費量を大きくすることで物価が上昇する一方、農村の購買力は常に一定しているため物価の高騰に生活が苦しめられる、すなわち、「都会は益々栄え、田舎は益々衰へる」⁸⁷⁾との結論を導き出す。そこで、土田は農村救済策として、農村が経済的信用力を創造し、自らの生産物を都市に購入してもらおうことなく、すべて農村自身で購入できる購買力を得るべきだと主張する。具体的に、経済的信用力を創造するための「農民銀行」、農村内部で生産物を消費するための「消費組合」の設立を提案する⁸⁸⁾。農村が購買力を得たことで、「絶対消耗体」である都市は生産物が回らなくなり破綻する。その結果、都会に流れていた人口は再び農村へ戻り、農村は生産と消費が調和した理想的な町並みとなる。土田は農村に対して、次のような幻想を抱いたのである。

何と美しい田舎だらう。そこには自動車が自由に往復する大道が通つてゐる。そして田舎にはやはり田舎らしい緑葉の並木が走り、山は光りに潤うてただこの美しい光景に感謝してゐるやうに見える。その間に点綴せられる農村は、何れもがつしりとした瀟洒な建築から出来てゐる。農民達の家まじつて消費組合の大きな百貨店が建ち、農民銀行の支店も建つて見える。さうだ、映画館や劇場や図書館も、田舎に立派なものが建つてゐるのだ。そして農民の住宅へ這入つて見ようものなら、どこの家の生活も実に裕福さうで、土間に最新式の農具があり、食器棚には気品の高い芸術的な食器が並び、書棚や楽器が並んで

86) 土田杏村『農村問題の社会学的基礎』改訂増補版、1931年、『土田杏村全集』第8巻、413頁。

87) 同前、411頁。

88) 土田杏村『文明は何処へ行く』1930年、『土田杏村全集』第8巻、361頁。

る。何とこれは羨しい生活ではないか⁸⁹⁾。

この頃、伝統的な日本の農村にロマンティズムを抱いて反近代・反西洋を主張する権藤成卿や橘孝三郎らの農本主義者が超国家主義運動に関与するようになるが、土田の理想とする農村は、都市の消費文化、近代文化を十分に享受したものであった。自由大学運動を通じて信州上田の農村青年と交流を持ち⁹⁰⁾、埼玉の農民運動家として知られる渋谷定輔とたびたび会っていた⁹¹⁾土田は、農村の実態や農民の望むものを知悉していた。土田は、功利という点を無視しては、民衆の心を捉える現実的な思想・言論にはなり得ないことを十分理解していたのである。

V. 石橋湛山 (1884-1973) の小日本主義

東洋経済新報社という職場の関係上、理想主義的人生観を有しながら、経済評論家として活躍したのが、石橋湛山であった。これまで、小日本主義とよばれる石橋の経済・外交思想に関しては、道義的色彩が薄く、功利主義的であるとの指摘があった⁹²⁾が、近年の石橋の思想形成や宗教観に関する研究の進展は、彼の本質が理想主義者であったことを明確にしつつある。

石橋が、のちに日蓮宗の管長を務めることになる杉田湛誓を父として生まれ、幼少の頃より高僧・望月日謙のもとに預けられたのは周知の事実であるが、自らを「有髪の僧」と称した石橋の根源的な精神には日蓮仏教の影響があったものと考えられる⁹³⁾。旧制中学時代に執筆した「消夏随筆」(1901年10月)に引用して以来、石橋がたびたび触れた日蓮の文章は、『開

89) 同前、366-367頁。

90) 土田と自由大学運動との関係については、上木敏郎『土田杏村と自由大学運動—教育者としての生涯と業績』(誠文堂新光社、1982年)を参照。

91) 土田と渋谷との交流に関しては、渋谷定輔『農民哀史から六十年』(岩波新書、1986年)を参照。

92) 姜克實『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1992年、176頁。

93) 石橋と日蓮仏教との関係については、石村柳三『石橋湛山—信念を背負った言説』(高文堂出版社、2004年)を参照。

目抄』の次の一節である。

善につけ、悪につけ、法華経をすつるは地獄の業なるべし、大願を立てん、日本国の位をゆづらん、法華経を棄て観行等について往生を期せよ、父母の頭を^(ママ)刎ねん、念仏申さずば^(ママ)なんど、の種種の大難出来ずとも智者に我が義やぶられずば、用ゐじとなり、其外の大難、風の前の塵なるべし、我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん、等とちかひし願、やぶるべからず⁹⁴⁾

これまで、「日本の柱」や「智者に我が義やぶられずば、用ゐじとなり」などの語句に注目が集まり、その石橋への影響が論じられてきた⁹⁵⁾が、この『開目抄』が、師の佐渡流罪という最悪な状況を目の当たりにして信仰が揺らぎつつあった門徒に対して、日蓮が自己の信仰の正当性を強調して、不退転を促す文章であった⁹⁶⁾ことを考えると、「ちかひし願、やぶるべからず」という点を日蓮は強調したのであり、石橋もそこに注目したのではないか。周囲からいかなる誘惑や弾圧があろうとも、ひとたび自身に誓った信念は貫き通さねばならない。これこそ石橋が生涯の目標としたものではなかったか。「宮内官と地方官吏」(1911年9月)と題する論文では、日蓮が佐渡流罪赦免後、時の権力者・平頼綱から所領を与えるとの申し出を断った心境を記した、「王地に生たれば身をば随へられたてまつるやうなりとも心をば随へられたてまつるべからず」(『撰時抄』)という一文を引用し、「日蓮の偉大は最もよくこの瞬間に於て発揮せられた。(中略)然れども日蓮は依然として日蓮であった。敢然として「心をば随へられたてまつるべからず」と拒絶した。彼れは心の自由を愛した勇者であった⁹⁷⁾と述べている。「心の自由」あるいは「心の財」こそ石橋がその生涯を通じて追求したものであった。

94) 『石橋湛山全集』第16巻、東洋経済新報社、2011年、15頁。

95) 前掲石村書は、石橋が「智者に我が義やぶられずば、用ゐじとなり」の文言に「自由討議の精神」を見出し、言論人としての姿勢に大きく反映されたと見る。100-102頁。

96) 日蓮の生涯については、佐藤弘夫『日蓮』(ミネルヴァ書房、2003年)を参照。

97) 『石橋湛山全集』第1巻、1971年、185頁。

山梨県立尋常中学校の最終学年において、石橋は赴任して来た大島正健校長を通じて、W・クラークの存在を知り大きな影響を受ける⁹⁸⁾が、これはクラークの思想のなかに日蓮仏教との共通点を見出したからであろう。日中戦争下において発表した「クラーク先生を思う」(1937年11月)という一文で、石橋は、クラークが札幌農学校教頭としての八か月間、「外から何をせよ、何をなしてはならぬと強うるのでなく、青年の心の中から自発的にその規矩を発明せしめることに眼目を置いた」教育を展開したことを評価し、「一切の行為の規準を自覚に求める態度」に「個人主義の精髓」があると主張した⁹⁹⁾。日蓮とクラークを通じて形成された石橋の思想の本質は、理想主義的個人主義であったといえるだろう。

その後、早稲田大学に進学した石橋は、田中王堂に出会い、プラグマティズムの影響を受けた。そのことにより、石橋の理想主義は観念的になることを免れ、現実社会を批評する価値基準として発展することができたのである。「哲学は人を生かすものである」と考え、「モット生命あり力あり熱情ある哲学」の出現を願った石橋¹⁰⁰⁾は、書齋の哲学者ではなく、街頭の批評家として生きる道を選択した。そして、資本主義経済の矛盾が露わになった「動揺せる時代」において、「欲望は、矢張何処までも進展させて行く。併し其進展の中に、或統整を見出さんとする」「新たなる哲学」の出現に期待したのである¹⁰¹⁾。1911年1月に東洋経済新報社に入社した石橋は、「欲望否定の哲学」ではなく「欲望統整の哲学」に基づき、経済を中心とした諸問題について快刀乱麻を断つように批評していったのである。ここに、功利と道義が見事に調和した、我国の論壇・思想界では極めて稀有な言説が登場することになったのである。

石橋が言論人・思想家として最も高い評価を得てきた論文の一つが、「大

98) 芳賀綏は、石橋がクラークとの出会いによって、「人格形成・思想形成のスプリングボードを得た」と指摘している。前掲芳賀書、112頁。

99) 『石橋湛山全集』第10巻、1972年、521頁。

100) 石橋湛山「三月の教学界」1909年4月、『石橋湛山全集』第1巻、144-145頁。

101) 石橋湛山「動揺せる時代の哲学」1921年1月、『石橋湛山全集』第4巻、1971年、589頁。

日本主義の幻想」（1921年7-8月）である。石橋の小日本主義を象徴するこの論文は、アメリカのハーディング大統領の招請により、ワシントンにおいて第一次大戦後のアジア・太平洋の新秩序を話し合う会議の開催が決定されたのを受けて、石橋がその会議に臨むべき日本の態度を論じたものである。ワシントン会議開催の真意が、大戦中に東アジアでの権益を拡げた日本の帝国主義に歯止めをかけようというものであったことは明白であり、日本政府やマスメディアはその対策に苦心することとなった。そうした状況のなかで、石橋が主張したのは、日本の国策を大日本主義から小日本主義に大きく転換して、すべての植民地を放棄するという前代未聞のものであった。しかも、それは単なる空論ではなく、経済上の裏付けがしっかりとされていたものであった。

石橋は、1920年における日本に対する朝鮮、台湾、関東州のそれぞれの輸出額と輸入額を呈示して、アメリカ、イギリス、インドとの貿易額を比較する。すなわち、朝鮮、台湾、関東州の三地の輸出入の合計額は9億1千5百万円であり、アメリカに対する輸出入の合計額14億3千8百万円に到底及ばない。また、インドに対する輸出入の合計額は5億8千7百万円、イギリスに対しては3億3千万円であり、朝鮮（3億1千2百万円）、台湾（2億9千2百万円）、関東州（3億1千万円）の何れも、イギリスに対する商売にさえ及ばないと指摘し、「貿易上の数字で見ると、米国の朝鮮台湾関東州を合せたよりも、我れに対して、一層大なる経済的利益関係を有し、印度、英国は、夫々、朝鮮台湾関東州の一地乃至二地に匹敵し若しくはそれに勝る経済的利益関係を、我れと結んでおるのである。若し経済的自立と云うことを云うならば、米国こそ、印度こそ、英国こそ、我れ経済的自立に欠くべからざる国と云わねばならない」¹⁰²⁾との結論を導き出したのである。

さらに、石橋はエコノミストとしての専門的知識を生かして、日本の植民地における資源についても触れる。日本の工業上、最も重要なる原料は

102) 『石橋湛山全集』第4巻、16頁。

棉花であり、それはインドとアメリカからの輸入に頼っている。日本人の主食の米にしても、主にフランス領インドシナやタイから来るのであって、朝鮮と台湾からの輸入は合わせても2,3百万石程度に過ぎない。「石炭にせよ、石油にせよ。鉄にせよ、羊毛にせよ、重要と云う程の物で、朝鮮、台湾、関東州に、其供給を専ら仰ぎ得るものは一もない」¹⁰³⁾とまで言う。では、過剰人口の捌け口としての価値はどうか。石橋は、最新の調査に基づいて、台湾、朝鮮、樺太などの植民地およびその他の移住者の総計を80万人弱とはじき出す。日本内地の人口6千万人と比較し、移住することでの「有形無形の犠牲」はそれに見合わない指摘し、「海外へ、単に人間を多数に送り、それで日本の経済問題、人口問題を解決しようなど云うことは、間違いである」¹⁰⁴⁾と述べる。経済的利益という点からすると、労働者を海外に送るのではなく、資本を外国の生産業に投じて間接に経営する道が正しい。「要は我れに其資本ありや否やである。而して若し其資本が無いならば、如何に世界が経済的に自由であっても、また如何に広大な領土を我れが有しても、我れは、そこに事業は起せない。殆ど何の役にも立たぬのである。然らば則ち我国は、孰れにしても先ず其資本を豊富にすることが急務である」¹⁰⁵⁾という。

では、国防という観点からの植民地の価値はどうか。石橋は、「日本の本土の如きは、只遣ると云うても、誰れも買い手は無い」、「若し米国なり、或は其他の国なりが、我国を侵略する虞れがあるとすれば、そは蓋し我海外領土に対してであろう」と推測し、植民地を持っているがゆえに、国防の必要が生じるのであり、それは「我国防の垣」などではなく「最も危険な燃草」であると指摘する¹⁰⁶⁾。

植民地を持つことが経済的軍事的観点から不利益であることを説いた石橋は、結論として、その小日本主義を簡潔に表現する次の文章で締め括る。

103) 同前。

104) 同前、21頁。

105) 同前、28-29頁。

106) 同前、19頁。

我国が大日本主義を棄つことは、何等の不利を我国に醸さない、否畜に不利を醸さないのみならず、却って大なる利益を、我れに与うるものなるを断言する。朝鮮、台湾、樺太、満州と云う如き、僅かばかりの土地を棄つことに依り広大なる支那の全土を我友とし、進んで東洋の全体、否、世界の弱小国全体を我道徳的支持者とすることは、如何ばかりの利益であるか計り知れない。若し其時に於て尚お、米国が横暴であり、或は英国が驕慢であつて、東洋の諸民族乃至は世界の弱小国民を虐ぐるが如きことあらば、我国は宜しく其虐げらるる者の盟主となつて、英米を膺懲すべし。此場合に於ては、区々たる平常の軍備の如きは問題でない。戦法の極意は人の和にある。驕慢なる一、二の国が、如何に大なる軍備を擁するとも、自由解放の世界的盟主として、背後に東洋乃至全世界の心からの支持を有する我国は、断じて其戦に破るることはない。若し我国にして、今後戦争をする機会があるとすれば、其戦争は当に斯くの如きものでなければならぬ。而かも我国にして此覚悟で、一切の小欲を棄てて進むならば、恐らくは此戦争に至らずして、驕慢なる国は亡ぶるであろう¹⁰⁷⁾。

第一次大戦後、民族自決主義が世界に広く浸透していくなかで、西洋列強に先んじて日本が帝国主義を放棄し、「自由解放の世界的盟主」としての役割を担う、これこそ、石橋が思い描いた理想的な日本の姿であつた。それは、軍事・経済大国路線から道義・経済大国路線への転換であつたともいえる。道義に基づく行為を貫くことで、功利的に得る所が大きい。あるいは、功利を追求していくことがそのまま道義に適う行為となる。功利と道義が見事に調和した論理をここに見出すことができるだろう。

この石橋の主張とは逆に、日本が帝国主義政策を進めることが道義に適うと説いたのが、「パイカル博士」として知られる戸水寛人であつた。戸水は日露戦争前、対露強硬論を主張して、東京帝国大学の同僚らと「七博士意見書」を發表したことで名高いが、二十世紀に入ってまもなく、「侵略

107) 同前、29頁。

主義と道徳」(1901年3月)という論文を発表している。

領土拡張をしなかつたならば、余つた人口を植付ける所もなし、甚だしきに至つては二十世紀以後の大勢に適することが出来なくて、亡びるであらうと思ふ。若しも亡びるとすれば是即ち祖先の守つて居つた所の国を失ふのである。即ち祖先に対して不孝である。若しも亡びるとすれば日本に君臨せられて居る所の皇室が領土を失はれるのである。坐視してそれを待つのは是は皇室に対して不忠である。詰り私の考では、今日にあつては侵略主義、領土拡張主義、敵国撲滅策、是等は皆必要なのであつて、(中略)他国を侵略しないのが非常な不道徳—不道徳の骨頂だと思ふのであります¹⁰⁸⁾。

これは、第一に帝国主義政策こそ日本が生きるうえで必要不可欠な道である、第二に道義が教育勅語に説かれる忠孝に限定されているという点で、石橋の主張とかけ離れている。理想主義的個人主義をバックボーンとしていた石橋にとって、道義とは、偏狭な忠君愛国の域を超えた普遍的なものであった。また、エコノミストが本業である石橋は、本当の経済的利益がどこにあるのか、人口問題はいかに解決できるのか等も知悉していた。

その後の日本の歩みが、石橋の説く方向ではなく、戸水が主張する方向へと進んだことは周知の事実であるが、表向きはアジアに対する侵略者としての顔を伏せて、西洋列強の支配からの解放をもたらす「自由解放の盟主」として臨んだことは、今日においても「大東亜共栄圏」もしくは「大東亜戦争」の真実を捉えがたいものにさせている。石橋のような功利と道義の両面を徹底的に追求していく姿勢が、日本人一般に欠けていたところに、悲境に向かつて歩まざるをえなかつた要因があるように思える。

敗戦後、「世界平和の戦士」としての役割を日本に期待した¹⁰⁹⁾石橋は、冷戦体制が深刻化するなかで、日本が中心となって、「日中米ソ平和同盟」の締結を実現させようと努力する。「日本小なりと雖も、理に従ひ義に

108) 『倫理界』第2号、1901年3月、6頁。

109) 石橋湛山「更生日本の門出—前途は実に洋々たり」1945年8月、『石橋湛山全集』第13巻、1970年、6頁。

よって人類のため自ら是を是とし非を非とし、行動することを声明すべきである。非には従わぬ、これこそ我が国の立場である」¹¹⁰⁾ という主張は、冷戦体制が崩壊してから四半世紀になろうとしている今日においても十分通用するものといえないだろうか。

おわりに

近代日本における思想家の第一世代といえる福沢諭吉が、近代国家にいち早く発展させるべく、道義から功利への価値観の転換をすすめたのに対して、第二世代の内村鑑三は、近代化に伴う社会的矛盾が現れるなかで、功利を否定し道義に立ち戻るべきことを主張した。第三世代にあたる河合栄治郎、土田杏村、石橋湛山は、近代化の功罪を十分認識できていたため、功利を棄てることなく、道義と調和できる方向を選んだ。

第三世代の彼らの考える道義とは、周囲からそのまま与えられるというものではなく、自己の哲学的思索の結果得られた内発的なものであった。

「大正教養主義」とよばれる明治末期から昭和初期にかけての理想主義的思潮のなかで、思想形成を遂げた第三世代の彼らは、既成の宗教や哲学に満足することができず、いかに生きべきかとの本源的な課題の探究に自らが真摯に取り組み、解答を得ようとした。その結果、時代やイデオロギーを超えた普遍的な思想が引き出されることになったのである。しかも、彼らは現実社会の問題にも無関心になりえず、社会科学や社会批評の世界に積極的に進出して、建設的な意見を発表していったのである。しかし、戦後、大量生産・大量消費社会の進展とともに、彼らの思想は忘れ去られていった¹¹¹⁾。人間は、物質的に満たされて快適な生活に慣れると、本源的な問いを忘れてしまうものらしい。

110) 石橋湛山「『日中米ソ平和同盟』の提唱－はたして出来ない相談か」1961年8月、『石橋湛山全集』第14巻、1970年、400頁。

111) 河合の直弟子で、その著作を出版していた社会思想社の責任者であった関嘉彦によると、1951年頃から急速に河合の著作が売れなくなっていったという。渡部昇一・関嘉彦「なぜ、今、河合栄治郎か」『かくしん』161号、1984年1月、71頁。

地球温暖化や原発の問題を抱え、日常生活においてさえ生命の危険が感じられつつある今日、再び、河合、土田、石橋らの思想に注目すべき時が来ているように思える。